Challenge

# 知識科学で開く扉。

## 文系からのチャレンジ

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY
1990

北陸先端科学技術大学院大学
*Japan Advanced Institute of Science and Technology*

JAIST先輩に聞く！

# 知識科学で開く扉。

## 文系からのチャレンジ

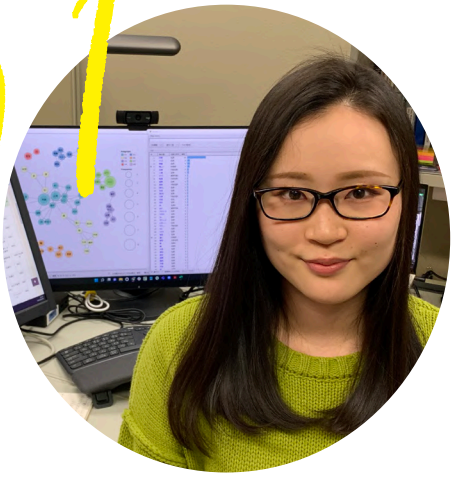

P3 … 星住　弥里さん
「JAISTで得た広く深い視点。相手を理解することは、自分と向き合うこと。」

P5 … 山田　大誠さん
「自分のやりたいことを覚悟を持って追求。JAISTでの学びの先に見えた夢のカタチ。」

P7 … 菊池　悠依さん
「分野横断のできるJAISTで、好奇心旺盛に学んだことが今の自分の原動力！」

P9 … 滝ヶ浦　正尚さん
「JAISTでの学びを行政に生かす。研究を地元地域の活性化へ繋げたい！」

01



# JAISTで得た広く深い視点。相手を理解することは、自分と向き合うこと。


## 星住　弥里さん　*Misato Hoshizumi*

・北陸先端科学技術大学院大学　先端科学技術研究科
　橋本研究室　博士前期課程（知識科学）在学
・神戸学院大学　グローバル・コミュニケーション学部　卒業


**Ｉ 現在、博士前期課程の2年目の星住さんですが、北陸先端科学技術大学院大学（以下ＪＡＩＳＴ）への志望動機を教えてください。**

大学では、文系の学部でグローバルコミニュケーション学を専攻していました。その中でも英語を用いたコミニュケーションを中心に、さまざまなバックグラウンドを持つ人同士や、言語を用いないコミュニケーションのスキルについて学んでいました。学んでいくうちに大学院への進学を考えるようになり、当時の先生から「名前は理系っぽいけれど、あなたのしたい文系分野も学べる学校があるよ」と教えていただいたのが、ＪＡＩＳＴを知ったきっかけです。興味があったので、大学3年の秋にオープンキャンパスに行きました。その時、今所属している橋本先生から研究についての話を聞き、この先生のもとで自分の研究をさらに深めたいと思いました。今まで関わったことのない分野の人たちと、共に学び合いながら、自分のコミュニケーションスキルを上げたいと思ったことも、大きな要因です。

**Ｉ オープンキャンパスでの印象はいかがでしたか？**

研究に集中するには、最高に魅力的な環境だなと思いました。というのも、私が以前行っていた大学は通学に大きな街を経由するので、ついつい途中下車が多くなりがちで…。もちろんいい面もあるのですが、行き帰り遊べてしまう環境で勉強時間が減ってしまい、私には向いていなかったです。ＪＡＩＳＴはのどかなところにあり、深く勉強するには適していると思いました。

**Ｉ 受験対策はどのように進めましたか？**

最も時間を割いたのは、自分がしたいことは何か、大学院で何を勉強したいのか、そのために自分はどんな手法を使って何をやるつもりかということを練り上げることでした。まず自分の考えをまとめ、次に大学の指導教員の先生にも相談しながら研究に対する考えを深めました。それを小論文としてまとめ、出願しました。

**Ｉ 実際に入学してからの生活は順調でしたか？**

順風満帆だった、とは言えません。入学前は、全く不安はなかったのですが、ゴールデンウィーク前に「私ここでやっていけるのかな…」と、かなり深刻に思い悩んでしまいました。今になれば、いい経験だったと思えるのですが、当時はかなり戸惑いました。

**Ｉ 例えばどんな時にそう感じられましたか？またどのように克服したのでしょうか。**

グループディスカッションの時、疑問に感じる箇所や発想が私とは全く違っていて、なぜそれを疑問に思い、そのような発想になるのか、全く理解できないことが多々ありました。まるで日本にいながらにして、外国にいるような感覚でした。しかし、しばらくしてどうしたらここで適応できるかと考え始めました。無条件に周囲に合わせるのではなく、自分のバックグラウンドから生じた芯となる考え方を保ちつつ、周りに適応していく方法を探す毎日でした。方向性が見えてきたのは、夏休みが終わった9月頃です。きっかけは試行錯誤の中で手に取った、異文化の人たちと円滑にビジネスを進めるための方法について書かれた書籍に出会ったことです。その中に記載された「ものの見方」を分類する方法に、周囲の人たちを当てはめてみました。すると、冷静かつ具体的に分析することができ、理解もしやすくなりました。それから少しずつ、自分なりのコミュニケーションをとることができるようになったと思います。

研究室のベランダから見た美しい夕焼け

**Ｉご自身で意識や視点を少しずつ変化させていったのですね。現在はどうですか？**

最初の頃のような深刻な気持ちは全くなくなり、むしろ「違うことが楽しい！」と思うようになりました。今までのような伝え方をしたらここでは通じない、と気づいてからは、周りの人たちの言動を観察し、その人たちの伝え方に合わせて自分の考えをのせるようにしています。授業でせっかく議論する機会があるのに、自分の考えを伝えられないまま終わるのはもったいないですし、ジレンマが溜まるので、常にどうしたらものごとを正確に伝えられるかを考えています。

**ＩＪＡＩＳＴでは現在、どのような主テーマ研究をされているのですか？**

希望通り橋本先生の研究室に所属し、コーパス言語学（実際に使用された言語の産出データを研究対象とする言語学の一分野）の手法を用いて、現代の差別語について、例えばどのような経緯で差別語になったのか、社会との関係性について研究しています。このテーマを選んだ理由として、私の育った環境が大きく影響していると思います。私の育った地域には、ベトナム戦争の難民受け入れセンターがありました。生活している中で地元の人たちとベトナムの人たちとの間に壁を感じることがあり、疑問に思っていました。その思いはずっと続いて、大学生の時も不条理で不当な扱いを受けている人たちに焦点を当てた研究をしたいと思っていました。

**Ｉ現時点で将来をどのように考えていますか？**

入学した時、研究の分野を変えるので基礎からしっかり学びたいと思い、Ｉ年多く学べるＭαプログラム（※Ｉ）を選択しました。研究を進めていくうちに、また実際に就活をしてみて、さらに研究の質を高めたいと学内進学や他の大学院への進学も検討しました。しかし、まずは一度社会に出て見聞を広め経験を深めてから、改めて研究をするという道も考えています。

※Ｉ…Ｍαプログラム：分野変更者または基礎からじっくり学びたい学生を対象として、2年間から3年間でＭプログラムと同様の修士教育を行うプログラム。2年分の授業料で最長3年間までの計画的な履修が可能。

**Ｉ研究室ごとにゼミのやり方は異なるのですが、橋本研究室のゼミはどのようでしたか？**

毎回、発表者が2人、他の人は聴衆として参加する形式で何ヶ月かにＩ回の頻度で発表がまわってきます。発表する時は、テーマの違う聞き手にどう話せば伝わるかを考えます。また他の人の発表を聞くことも楽しいです。専門的な部分はわからなくても、発表者の伝えようとしていることを汲み取り、質問をしたことが相手に伝わって、私も発表者のテーマの一端を理解できた、と感じる時は達成感があります。発表する側も聴く側も、得るものが多いゼミはとても貴重な時間です。

**Ｉ学生同士のつながりや先生との関係はどうでしたか？**

大学時代に比べて、友人関係は密だと思います。特に細部まで気持ちを共有できる同じ研究室の同期は、同志のような存在です。一方、広い視点から意見をしてくれるのは、他の研究室の同期です。橋本先生は、最初は話しをするのも緊張していたのですが、今では気さくに相談しています。

**Ｉ最後にＪＡＩＳＴの魅力を教えてください。**

たくさんあるのですが、研究室に自分の座席があるなど、研究に集中できる環境設備が充実していることは大きな魅力です。自分専用の居場所があることで、いつでも研究に向かうことができ、とても助かります。次に、他分野の学生と触れ合えることです。違うものの見方、考え方を持つ者同士が切磋琢磨し合う学生生活は、とても貴重な体験だと実感しています。

写真左から
1. 自分のブースで主テーマの研究　2. 毎日の疲れは大好きな焼肉で回復！

02

就職間近の先輩に聞く！

# 自分のやりたいことを覚悟を持って追求。JAIST での学びの先に見えた夢のカタチ。


## 山田　大誠さん　*Taisei Yamada*

・北陸先端科学技術大学院大学　先端科学技術研究科
西本研究室　博士前期課程（知識科学）修了（2022 年 3 月）
・関西大学　商学部　商学科（ファイナンス専修）卒業


**Ｉ 修了間近とお聞きしました。振り返ってみてＪＡＩＳＴでの学びはいかがでしたか。**

現在、博士前期課程のＭαプログラム（※1）の3年目で、西本研究室に所属しています。入学するまでは講義についていけるのか、単位が取れるのか、とてつもなく不安でしたが、いざ入学してみると思っていた以上にスムーズに単位が取れました。ＪＡＩＳＴの授業そのものがクリエイティブでとても楽しく、受講することが全く苦にならなかったからです。特に、専攻分野である知識科学系の授業は、知識を丸暗記するのではなく、自分で考え、仲間たちとディスカッションしながら答えを導き出していくスタイルで、僕の得意分野でした。楽しくやりがいのある授業を受けた上に、好成績までいただいて嬉しい限りでした。

※1…Ｍαプログラム：分野変更者または基礎からじっくり学びたい学生を対象として、2年間から3年間でＭプログラムと同様の修士教育を行うプログラム。2年分の授業料で最長3年間までの計画的な履修が可能。

**Ｉ 以前の大学ではどんな研究をされていたのですか？**

大学では商学部のファイナンス専修に属し、主に漫画やアニメなどのコンテンツビジネスや、クラウドファンディングについて勉強していました。ファイナンス専修ということもあり、コンテンツビジネスとクラウドファンディングの組み合わせによる新しいビジネスモデルの形を研究テーマにしていました。

**Ｉ ＪＡＩＳＴへの進学はどのような経緯で考えられたのですか？**

大学で勉強を進めていくうちに、自分はなぜ漫画家になれなかったのか？と思うようになりました。漫画が好きな僕は、それまでに何度か漫画を描こうと試みたこともありましたが、飽きっぽい性格ゆえに続けることができませんでした。それは全ての行程を一人でこなすには、あまりにも労力がかかりすぎて、途中で疲れて諦めてしまうからです。そのハードルをもっと低くして、誰もがもっと気軽に漫画が描けるようにしたい！と思うようになりました。やる気だけはあるものの、具体的にどうすればいいのか皆目見当がつかず、試行錯誤を繰り返しているうちに、ヒューマンコンピュータインタラクションの創造活動支援という分野に行き着きました。理系で情報系の分野は、僕とは畑違いでしたが、人の創造活動支援という研究内容は、まさに自分が探し求めていたことでした。その分野の中でもＪＡＩＳＴの西本先生は、初心者など、あまり創造性を発揮できていない人のための支援を中心に研究している、数少ない研究者のひとりでした。そこでＪＡＩＳＴへ行くしかない、何が何でも行こうと決心しました。

**Ｉ 西本先生に辿り着いたのは、ツイッターでの発信がきっかけだったそうですね。**

はい。「こういったことをやりたい」ということや、「創作はこうあるべきだ」といったことをツイートしていたのですが、偶然にも西本研究室ＯＢの明治大学の宮下先生が発見して、ご連絡くださいました。そこから、やりとりが発展し、西本先生を紹介してもらったことがきっかけです。

**Ｉ ＪＡＩＳＴは外から見ると、理系の学校とイメージする人の方が多いようです。不安はなかったですか？**

知識科学系には知識マネジメント領域とヒューマンライフデザイン領域があり（※2）、知識マネジメント領域は大学時代に在籍していた商学部と雰囲気が似ていて、文系っぽいなと思いました。一方、僕の興味のあったヒューマンライフデザイン領域は理系のイメージがありました。入学前はとてつもなく不安でした。大学院に進学する時、文系から理系に変わることはほとんどありません。周囲にもそんな人はいなくて全く想像がつかず、入学後の生活や、授業についていけるかなど、不安しかありませんでした。ただ、その不安を上回るくらい、創造活動支援の勉強をしたいという気持ちが強かったです。どんなに困難なことが待ち受けていても自分はここでやらないとダメだ、やるんだ！という覚悟を持ってＪＡＩＳＴに進学しました。

※2…2022年度から新しい研究領域に生まれ変わり、知識科学系の研究領域は、創造社会デザイン研究領域、トランスフォーマティブ知識経営研究領域、共創インテリジェンス研究領域となります。

**Ｑ 先生方との出会いも大きかったのではないでしょうか。**

もちろん大きかったです。やりたいという気持ちだけはあるものの、自分ではうまく形にできずにいたことが、研究テーマとして存在すること、それを現に研究している人がいることが嬉しく、ありがたかったです。この研究をしたいと思っているのは、自分だけじゃないんだと実感し、とても勇気づけられました。

**Ｑ ＪＡＩＳＴの研究や生活の中で、「英語」に関しての苦労は何かありましたか？**

確かに入学後、研究を進める上で、英語の文献はたくさん読まなければなりませんでした。しかし今は優れた翻訳サービスがあるので、上手く活用すれば対応できるはずです。もちろん、英語ができることに越したことはありませんが、「英語が苦手だから」とせっかくのチャンスを逃してしまうのはもったいないと思います。英語が苦手なことが、研究を諦める理由にはならないからです。

**Ｑ どのような主テーマ研究（※3）をされたかを教えてください。**

誰もが気軽に漫画を描けるようにするには、もっと気軽に「お絵描き」できる必要があるという考えから、その支援について研究していました。特に、試行錯誤しながら絵を描く時に生じる「消し跡」に注目し、そこに役立つ重要な情報が含まれているのではと考え、デジタルなお絵描きにおける消し跡の新しい在り方をテーマに研究しました。修士論文研究ではそのための基礎研究として、消し跡がお絵描きのプロセスにおいてどう役立っているのか、どのような意味を持つのかを調査しました。

※3…主テーマ研究は、修士論文研究、課題研究報告、または博士論文研究基礎力審査から、指導教員と相談の上、学生が選択します。

**Ｑ ＪＡＩＳＴは主テーマ研究の他に副テーマ研究も設けています。**

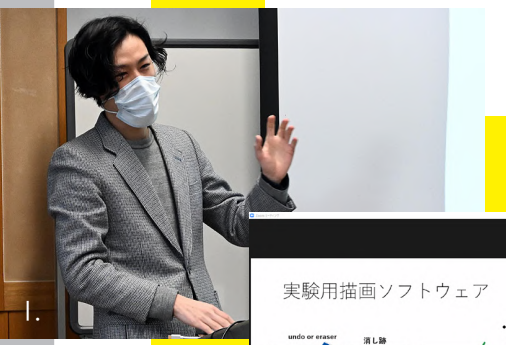
僕はＭＲグラス（ホロレンズ）を使った副テーマに挑戦しました。研究では、音楽を聴きながら歩いている時に、ＡＲ（拡張現実）技術を用いて周りの景色に歌詞を融け込ませて表示するシステムを開発しました。2人で取り組んだのですが、意見を交換しながら役割分担し、協力し合って完成させる行程は、充実感がありました。また主テーマ研究とは別のテーマを研究することによって、自分自身の視野はとても広がったと思っています。

**Ｑ 就職活動についても教えてください。**

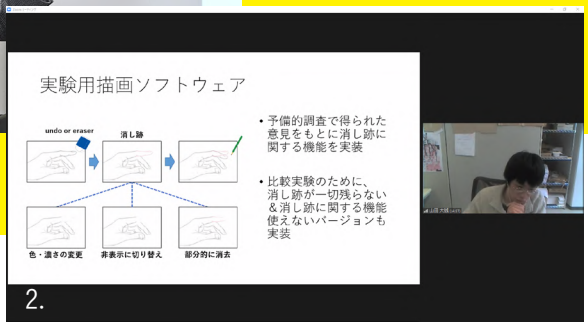
7月頃に、お絵描きソフトのＣＬＩＰ　ＳＴＵＤＩＯ　ＰＡＩＮＴなどを提供する、株式会社セルシスから内定をいただきました。Ｍαプログラムだったので、最初の2年間でみっちり研究に専念し、3年目はその成果を足掛かりに就職活動を進められたことは、とてもよかったです。

**Ｑ 最後にＪＡＩＳＴへの進学を考えている受験生にメッセージをお願いします。**

商学部にいた頃、創作活動を身近なものにしたいとは思っていましたが、実際に研究や、ましてや仕事にするイメージは全く持っていませんでした。そんな僕がＪＡＩＳＴに入ったことで、やりたかった研究ができ、就職まで道筋がつきました。自分のやりたいことが分野違いだからと悩んでいる方がいたら、思い切って飛び込んでみてほしいです。そして覚悟を持って、研究に取り組んでください。自分のやりたい気持ちを発信すれば、ＪＡＩＳＴは全力でその思いを拾ってくれるんだと実感しています。



1.




2.

3.

写真左から
1. 研究発表の様子　2. 外部研究会で主テーマについてのオンライン発表
3. 研究室の楽しいメンバーたちと

03

# 分野横断のできる JAIST で、好奇心旺盛に学んだことが今の自分の原動力！


## 菊池　悠依さん *Yui Kikuchi*

・株式会社日立製作所　サービス＆プラットフォームビジネスユニット
Lumada CoE NEXPERIENCE 推進部　勤務
・北陸先端科学技術大学院大学　先端科学技術研究科
伊藤研究室　博士前期課程（知識科学）修了（2020 年 3 月）
・就実大学　経営学部　経営学科卒業


**Ｉ現在のお仕事について教えてください。**

日立製作所のＮＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ推進部に所属し、現在２年目になります。業務内容をひとことで言うと、Ｅｘアプローチ（デザインシンキングを活用した顧客の経験価値を重視する協創手法）を活用した顧客協創活動を推進しています。「日立」と聞くと家電のイメージが強いかもしれませんが、実は日本のデジタル時代の黎明期からさまざまなＩＴシステムを開発しています。私の所属する部署では、システム開発の超上流工程（ビジョン・戦略策定からシステム化計画）にて、お客様と共に課題を発見し、課題解決に向けた将来のビジョンを共に創りあげていく活動を実践しています。加えて、デザインシンカー（顧客との協創により、デザイン思考によって課題を発見し、イノベーティブな解決策を創生する人材）を育成することで、日立全社でのデジタル化商談の獲得の強化をめざしています。

**ＩＪＡＩＳＴに入る前は大学で何を学んでいましたか。**

大学では経営学部に所属し、文化人類学の先生のもとで指導を受けました。４年間の大学生活のうち３年間は、観光を手段とした地域経営をテーマに研究を行いました。ゼミを通じてさまざまな地域でフィールドワークを行い、そこに住む人たちの営みを観察する中で彼・彼女らの価値観に触れ、「本当の豊かさとは何か」を常に考えていました。地域に対して誇りや愛着を持つ人たちの強さや暖かさを、身をもって学ぶことができました。

**その後なぜ、ＪＡＩＳＴへの進学を希望されたのですか？**

大学在学中は文化人類学の先生のもとで学んではいたものの、経営学中心のカリキュラムとなっていたため、研究しているテーマをもっと専門的に深めてみたいという気持ちになりました。文化人類学のものの見方や、エスノグラフィ（※参与観察やインタビューなどのフィールド調査を通して、自分の慣れ親しんだ文化とは異なる文化に生きる人々の社会生活について記述・分析する方法）に深く興味を持ち、自身のライフワークにも繋がる、没頭できるものであると確信していました。当時の先生に相談したところ、ＪＡＩＳＴでビジネス・エスノグラフィの研究をしている伊藤先生を紹介してくださったことが志望のきっかけです。

**Ｉ文系からの進学にあたって不安はありませんでしたか？**

入学後は、今までとは専門が異なる大学院の講義についていけるかという不安がありました。また、学校案内のパンフレットからＪＡＩＳＴは理系の学生が多いことを知っていたため、うまく馴染めるか心配していました。しかし、入学してみたら、他の人も同じように不安を抱えていることがわかりました。授業や課外活動を通じてたくさんの学友ができたことで、すぐに不安は解消されました。

**Ｉ受験準備はどのようなことをされましたか？**

６月のオープンキャンパスに行ってすぐに受験を決めたため、入試まで準備期間が１ヶ月もありませんでした。出願時にＪＡＩＳＴでどのような研究をしたいのかを記載した小論文を提出するのですが、大学の先生からのアドバイスを念頭において、ただ「研究をしたい！」という思いだけでなく、今までの研究に足りない部分を分析し、研究したい内容を具体的にアピールできる小論文の作成に励みました。また、面接では明るくハキハキと回答できるように意識していました。

写真左から
1. JAIST バレー部に所属し汗を流す
2. 授業で行った校内販売のエスノグラフィ調査

写真左から
3. ガンディナガール
プログラム修了式
4. 修士研究の
獣肉処理施設にて猪肉と私

**ーJAISTではどのようなことを研究テーマにしていましたか。**

伊藤先生の研究室に所属して、ビジネスエスノグラフィを専攻していました。修士論文では、野生鳥獣肉のジビエのビジネスの現場を見るために、フィールドワークとして羽咋市の獣肉処理施設に3ヶ月お世話になりました。現場の方々と一緒に作業をし、観察や分析をする毎日でした。ジビエの研究において、狩猟する際の方法についての論文は多くあるのですが、ビジネスと結びつけている研究はあまりないので「自分が書いてみたい!」と強く思いました。

**ー修士課程の途中で狩猟免許を取得されたとお聞きしました。**

はい。私は大学時代からさまざまな土地に行って現地の人や文化に触れ合うのが好きでした。研究テーマの探索の目的で北海道に行った時に、狩猟が趣味で現地に引っ越して来た人たちに出会ったことが大きなきっかけです。同じ「肉を消費する」という行為ですが、自分で鳥獣を狩って・捌いて・食べることは、スーパーで既に肉の状態になっているものを買って食べる私の「当たり前」が揺らぐものでした。私も狩猟できるようになれば、その人たちの価値観や気持ちがわかるようになるかと思い免許を取りました。羽咋市のフィールドで狩りに同行させてもらったり、獣肉処理の現場に入り込ませてもらったりすることで、地域の特徴に根ざした持続的なビジネスのありさまを見ることができました。

**ー研究室の伊藤先生の指導はいかがでしたか?**

いい意味で自由に自分の研究をさせてもらえました。大学院の2年間は自分が何をしたいのかを考え、探求していく時間だと考えていたので、ガチガチのカリキュラムの中では思うように研究できないなと思っていましたが、伊藤先生は私のやりたいことを尊重し、のびのびと自由に研究できる環境を用意してくださいました。もちろん、アイデアに対する新しいアプローチの提案や参考文献の書き方など論文を書く上での細かい指導はしてくださったので、とてもありがたかったです。

**ー菊池さんにとってのJAISTの魅力を教えてください。**

まず、領域を横断した学びができることです。JAISTは講義も多岐に渡り、いろいろな分野を学べます。学校側もそれを推奨しているのでカリキュラムも受講しやすかったです。さまざまな分野の学問を幅広く学ぶことによって視野も広がり、ひいては自分の研究もより広く深いものになると思います。

次に、クラスメイトや友人との関係性です。JAISTに集まる学生たちの年齢、国籍、専攻などのバックボーンは多岐に渡ります。またJAISTは寮生も多く、ほとんど大学院周辺で24時間共に過ごすことも珍しくありません。他校に比べ繋がりが密な環境のもと、仲間たちと交わす授業でのディスカッションや日常での会話のやりとりで、それまでの自分の常識を覆されることが多々ありました。

またインドの提携校(インド工科大学ガンディナガール校)に2週間留学する機会もあり、政治や社会に対してしっかりと自分の意見をもっている海外の学生に触れ、大変刺激を受けました。自分から意見を伝えることの重要性を学ぶ、いいきっかけとなりました。JAISTでは思いもしなかったような新たな視点が増え、相互の理解が深まり、毎日異文化交流をしているような当時の経験は、今の私の宝物です。

**ー最後にJAISTを目指そうとしている方々にメッセージをお願いします。**

分野横断のできるJAISTでさまざまな学問や考えに触れて2年間を過ごしてほしいです。それは仕事をしていく上でも、人生においてもとても大事なことだと感じています。私のモットーは「やらずの後悔よりやって後悔」です。このインタビューの記事が、受験に悩んでいる方の背中を押せたなら幸いです。応援しています。

04

# JAIST での学びを行政に生かす。研究を地元地域の活性化へ繋げたい！


## 滝ヶ浦　正尚さん　*Masanao Takigaura*

・石川県総務部総務課　勤務
・北陸先端科学技術大学院大学　知識科学研究科
　白肌研究室　博士前期課程（知識科学）修了（2015 年 3 月）
・北海道大学　法学部　卒業


**ＩＪＡＩＳＴへの進学の経緯を教えてください。**

幼少の頃から、いろいろな人の役に立つ仕事に就きたいと思っていたこともあり、北海道の大学では社会保障に関する法律を専門に勉強していました。特に、障碍者、生活保護受給者と言った社会的弱者の方々に対して、行政がどうすれば効果的な支援ができるかを中心に学びました。大学４年になり進路を考えた時、まずは故郷の石川県に戻って、地元に貢献できるようなことをしたいと思いました。またこのまますぐに就職するより若い今のうちに、柔軟な視点で広くものごとを見たい！という気持ちもありました。それで石川県内で進学先を探していたところ、ＪＡＩＳＴが目にとまりました。理系の学校だと先入観を持っていましたが、実は文理融合型で、文系の研究もできると分かり、ここなら自分の研究も今までのような法律だけの視点ではなく、違う視点からも学べるのではないかと思いました。さらにＪＡＩＳＴは大学を併設しておらず大学院だけなので、より専門的で多角的な研究ができそうな点も興味を惹かれました。研究環境が整っていると在籍している知人から聞いたことも、進学への後押しになりました。

**Ｉ入学後の不安はなかったですか？**

文理融合で文系の研究もできると理解はしていたものの、自分に何ができるのか、明確なイメージがわかず入学当初は不安でした。しかしいろいろな分野の人たちに、自分の今持っている知識を、どのように伝えることができるのかに興味がありました。大学時代は、書物の中で法律や判例を知識として学んでいましたが、ＪＡＩＳＴに入学すれば、そこに集うさまざまな人たちと学び合うことによって、今まで見えなかったものが見えてくるはずだと思っていました。その好奇心の方が不安より大きかったですね。

**Ｉ実際に入学して、ＪＡＩＳＴの講義はどう感じましたか。**

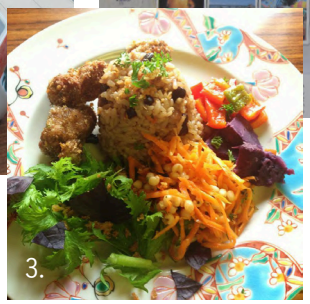
大学時代には触れることのなかった分野の講義も多かったのですが、数値化し、それをもとに推測し結果を出していく講義は、文献に添って結果を導き出す文系のプロセスとは全く異なり、とても新鮮でした。それは講義だけでなく、理系分野の人たちとの出会いも同様で、自分にはない考え方に触れる毎日は刺激的でおもしろかったです。講義は自分にとっては正直容易ではなく、最初から高度な内容で、ついていくのが精一杯でした。しかし、先生方のフォロー体制が万全で、わからない点は細かいところまでご指導下さいました。また、同期の友人たちと協力し合って、問題を解決したことも多々あります。以前の大学は大規模だったため、友人はいつも一緒にいる数人に限られていましたが、小規模なＪＡＩＳＴでは、お互いの得意なことや、どんな研究をしているのかを熟知していたため、多岐に渡る疑問も気軽に相談しやすい環境でした。こういった密な友人関係も、大学時代とは異なりおもしろかったです。

**Ｉどのような主テーマ研究をされていたのですか？**

白肌先生のもと、サービスを科学的に分析する研究をしていました。サービスを行う際の満足度の定義づけから始まり、どんな内容でサービスの構築を行えば顧客、さらには主催者の満足度を得られるかという研究をしていました。具体的には能美市の九谷陶芸村で、九谷焼の業者の方々と共同で、県外の方を招致し、九谷焼体験をしてもらう観光イベントを企画しました。そして体験後に

九谷焼関係者と観光プランを作成するための活動の様子

写真左から
1. 研究発表で北京へ　2. KJ 法を使って能美市の課題について考えるグループワーク
3. 九谷焼に地元の食材を使った料理を盛りつけ　4. 地域活性のため能美市かるたを作成



アンケート調査をし、双方の満足度を分析する調査を行いました。また苔で有名な小松市の日用町でも、苔盆栽体験を用いた観光イベントを企画し県外から来られた方の満足度を調査・分析しました。このように地域の産業や名物を介して観光サービスを作り、顧客と主催者、双方が満足度を得られるサービスの構築についての研究をしていました。

**ーJAISTでは英語に触れることも多かったのではないでしょうか。**

研究において英語の文献を読むことは必須で、英語は必要不可欠だと思います。在学中の思い出深い体験として、中国・北京にある北京航空航天大学の修士・博士学生と実施した国際シンポジウムがあります。とても実りの多い貴重な体験だったのですが、その時も発表は英語で行いました。海外に発信したり、聞いたりすることによって、視野が広がり学びがさらに深まります。自分の可能性を広げるチャンスを逃さないためにも、英語は学んでおいた方がいいと思います。

**ー修了後、現在は何をされていますか。**

希望していた行政職である石川県庁に入庁して7年目になります。納税課、東京大学先端大学研究所への出向を経て、現在は石川県立大学・同看護大学において、必要な資金を県の立場からサポートする部署に在籍しています。大学の研究プロセスへの要望、気持ちを理解した上で、私が大学の気持ちを代弁して上司に伝えることもあり、JAISTでの学びの経験が役立っています。学校の研究の現場と県が求めていること、双方をともに理解できる立場は、私の強みでありキャリアアップにも繋がっていると感じます。

**ーJAISTでの学びが役立っているなと感じることは他にもありますか。**

現在、車椅子用の昇降装置のコンパクト化を共同研究しています。これは、出向していた東京大学先端大学研究所のバリアフリーの研究者、石川県内の昇降装置などの介護器具を製造している業者が、共同で作り上げようとしている案件です。そこに私は、石川県の職員として関わっています。大学と企業が共同でひとつのものを作り上げて行く行程において、JAISTでのサービス視点の研究の経験が大いに役立っています。また、能美市の九谷陶芸村や小松市の日用町で行った研究経験も、現職の大学、企業、行政という異なる分野間のコミュニケーションスキルに生かされています。

**ー今後の展望について教えてください。**

JAISTで学んだような、大学における素晴らしい研究が、もっと一般にも普及して地域発展に貢献できるよう、行政の立場で関わりたいです。例えば、先ほどのような大学と地元企業の共同の企画や、県外の研究者に石川県にあるものを活かしてもらえるような企画です。JAISTで学んだ私だからこそ持てる視点で、大学のノウハウを用い、石川県をより豊かに活性化できるよう取り組んでいきたいと思っています。

**ー最後にJAISTを目指そうとしている方々にメッセージをお願いします。**

私もそうだったのですが「北陸先端科学技術大学院大学」という学校名から、難しそうなことをしていそう…と二の足を踏んでいる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、実際はさまざまな背景と専門分野を持つ人たちが集まり、お互いに助け合い、切磋琢磨し合って学校生活を送っています。研究に集中したい方、今の自分と違う視点で学んでみたいと思っている人には最適な学修環境だと思います。JAISTで過ごした2年間の学びは、現在の私の指針となっています。自分の望む研究を実現できるだけでなく、人間として成長する機会を数多く与えてくれる場でもありました。迷っているなら思いきって飛び込んでみませんか。きっとそこから、新しい何かが始まるはずです。

JAIST

JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY
1990